

Vol. 171

CONTENTS

- 【コラム】大規模私大における一般入試「情報」の導入～立命館大学の事例～…島田 伸敬
【解説】「高等学校情報科での学びに関する調査アンケート」の開発…越智 徹・白井 詩沙香・中國 長新・長瀧 寛之
【解説】令和7年度大学入学共通テスト『情報Ⅰ』の問題評価・分析について～初めての共通テスト『情報Ⅰ』を振り返る～…水野 修治



COLUMN

大規模私大における一般入試「情報」の導入 ～立命館大学の事例～

筆者の勤める立命館大学では、大学入学共通テストに初めて「情報」が導入された2025年度入試より、共通テスト併用方式「情報活用型」の入試方式を7つの学部において導入した。また2026年度入試では大学独自問題の「情報」を採用した一般選抜入試を7学部が導入する^{☆1}。理系学部は筆者の所属する情報理工学部のみで残りの6学部は新設予定学部も含めていわゆる文系（うち2学部は情報・英語に加え数学を課す「情報型理系」方式を採用）である。

私立大学で複数の文系学部を中心とした入試の記述式試験に情報科目を大規模導入する試みは稀有らしい。情報科学を深く理解し開発スキルを持つような尖った人材を確保するユニーク入試は情報系の学部・学科で多く実施されてきたが、本学のような文系学部への情報入試導入が積年にわたる高校情報科教育の定着と深化を基盤にしていることはいままでもない。特に新課程での科目「情報Ⅰ」の必修修化が情報入試導入への決定打となった。

学内で情報入試を企画した時点ではいくつかの学部が参画してくれるかまったく確証がなかったが、蓋を開けると専門としての情報から教養やリテラシーとしての情報が広範な分野から重視されていることを実感することとなった。断片知識や典型的「解法」を期待されているのではなく、情報科が「考え方・扱い方・手順」の科学～メタスキルである側面が支持されてのことと推察する。それ故、本学が公開している試作問題においても単純知識や難解な問題を避け、基礎知識をもとに筋道立ててじっくり考えることが得点に繋がる朴訥な出題を心がけた。理系学部ではさまざまな制約から初年度の導入には至らなかった。私大の一般入試では3科目型が最もポピュラーであり、英語、数学に加えあと1科目の選択において、2単位の情報Ⅰと4～6単位ほどある理科が天秤にかかる。傾斜配点で配慮、あるいは多様な入試方式でカバーする手法があり得るが、私大の入試政策として考えるとより多くの出願者を見込める併願方式をどう開発するか、後の展開を注視したい（ベタな話ではあるが経営上避けて通れない）。

入試科目化による課題もいくつか感じており、中でも情報学の専門的見地からみて首を傾げる模範解答が示されている教材が目につくが、その改善が進みにくい（指摘しても受け入れてもらえない）。情報科と情報学の間に齟齬があってはいけないはずで、入試問題が情報学の本質を問う形に洗練されていくことが望まれる。

^{☆1} 立命館大学入試情報サイト：一般選抜「情報」の本学独自入試の導入について、<https://ritsnet.ritsumeij.ac.jp/admission/general/Informatics.html>



島田伸敬（立命館大学情報理工学部）（正会員）nshimada@is.ritsumeij.ac.jp

立命館大学情報理工学部教授。博士（工学）。2024年より同学部入試／高大連携担当副学部長。コンピュータビジョン、ロボットビジョン、HCIの研究に従事。

「高等学校情報科での学びに関する調査アンケート」の開発

越智 徹
大阪工業大学

白井詩沙香
大阪大学

中園長新
麗澤大学

長瀧寛之
大阪大学

高等学校情報科における学びの変化

高等学校では、2018年3月に改訂された学習指導要領のもと、2022年度から共通教科情報科の必修科目「情報I」が年次進行で始まった。2025年度以降、各大学に「情報I」を履修した学生が入学する。このような高等学校での学びの変化を踏まえ、大学では一般情報教育科目や初年次の情報関連科目の授業内容を調整する必要がある。

たとえば、2013年度から施行された以前の学習指導要領では、情報社会に参画する態度に重点をおいた「社会と情報」と情報の科学的な理解に重点をおいた「情報の科学」の2科目が選択必修科目として設けられ、約7割の高等学校が「社会と情報」を選択していた。そのため、2024年度までは高等学校でプログラミングを学んだことがない大学新入生が多く、それを踏まえた授業構成が求められてい

た。しかし、2025年度以降は、(1)情報社会の問題解決、(2)コミュニケーションと情報デザイン、(3)コンピュータとプログラミング、(4)情報通信ネットワークとデータの活用の4つの学習領域が含まれる必修科目「情報I」をすべての高校生が学ぶことになる(図-1)。

さらに、2021年3月24日に大学入試センターが、学習指導要領改訂に伴う令和7年度大学入学共通テストからの出題教科・科目について、6教科30科目から、「情報」を含む7教科21科目に再編することを公表した。2025年1月19日に実施された令和7年度大学入学共通テスト第2日の最後の時間に「情報」が出題され、新課程対応の「情報I」と旧課程対応(移行措置科目)の「旧情報」あわせて302,493名(「情報I」だけでも279,718名)もの受験生が受験した²⁾。

このように、共通必修科目「情報I」の実施に加え、大学入学共通テストで「情報I」が出題されることで、高等学校までに育まれる基礎的な資質・能力が統一化されると期待される。しかし、学習支援環境の利用状況やプログラミング言語、授業の実施方法などは各学校・生徒の状況に応じて任意で選択されるため、高等学校によって多少の違いが生じると考えられる。高等学校情報科での学びの実態を把握することは重要である。

このような背景のもと、本会コンピュータと教育(CE)研究会では、高等学校情報科での学びに関する調査アンケート実施項目を整理し、各大学で自由に利用いただけるよう、2025年4月にCE研究会のWebサイトで公表した³⁾。本稿では、このアンケートの作成経緯や内容の詳細について紹介する。

(1)情報社会の問題解決

情報と情報技術を活用して問題を発見・解決の方法に着目し、情報モラル、情報と情報技術の適切かつ効果的な活用と望ましい情報社会の構築などについて考察する。

(2)コミュニケーションと情報デザイン

効果的なコミュニケーションを行うために、情報デザインの考え方や方法に基づいて表現する。

(3)コンピュータとプログラミング

プログラミングによりコンピュータを活用するとともに、モデル化やシミュレーションを通して問題の適切な解決方法を考える。

(4)情報通信ネットワークとデータの活用

情報セキュリティを確保し、情報通信ネットワークを活用するとともに、データを適切に収集、整理、分析し、結果を表現する。

図-1 学習指導要領における「情報I」の4つの学習領域(文献1)より引用)

アンケート作成の経緯

大学の一般情報教育科目や初年次の情報関連科目では、2025年度以降入学の学生に対応するために授業内容を調整する必要があるため、本会の一般情報教育委員会（GE）や大学 ICT 推進協議会（AXIES）情報教育部会をはじめ、関係各所で議論が進められてきた⁴⁾。筆者らも問題意識を持ち、それぞれ活動を進めてきた。たとえば、筆者の越智は2024年10月にFacebookへ次のような投稿を行った（図-2）。

この投稿で呼びかけた新入生向けアンケートの実施に対して、筆者の中園も含む、同じ課題意識を持った教員・研究者から多数の賛同が寄せられた。そこで、越智が代表となり、アンケート項目や調査方法の素案を作成することになった。

一方、筆者の白井は、大阪大学において一般情報教育科目の運営を担当しており、新入生に対して高等学校情報科での学びに関する調査アンケートを毎

緩募というかなんというか。

いよいよ来年4月から新課程の「情報」を受けた高校生が大学に入ってくるわけですが、やはりここは「どういう教育を受けたか」を調査するべき？ みんなでせーの、でアンケート取ってみる？ でも結局これまでとそんなにやってることは変わらなかったり？？

一応今のところ一番興味があるのは、どこまでプログラミングをやったかですね。もう基本部分は飛ばしちゃってもいいのか、あるいはやっぱり2024年まで同様に、「まず変数というのがあって……」から始めないといけないのか。少なくとも私立大学なら共通テストを受けていない可能性だってあるしなあ。

あとキーボードが使えない、というのはもう諦めました。たぶんこれはプログラミングを経験していてもそんなに変わらないだろう。



越智 徹

2024年10月29日・金

緩募というかなんというか。
いよいよ来年4月から新課程の「情報」を受けた高校生が大学に入ってくるわけですが、やはりここは「どういう教育を受けたか」を調査するべき？ みんなでせーの、でアンケート取ってみる？ でも結局これまでとそんなにやってることは変わらなかったり？？

一応今のところ一番興味があるのは、どこまでプログラミングをやったかですね。もう基本部分は飛ばしちゃってもいいのか、あるいはやっぱり2024年まで同様に、「まず変数というのがあって……」から始めないといけないのか。少なくとも私立大学なら共通テストを受けていない可能性だってあるしなあ。

あとキーボードが使えない、というのはもう諦めました。たぶんこれはプログラミングを経験していてもそんなに変わらないだろう。

図-2 Facebook の実際の投稿

年実施していた。2025年度に向けてアンケートの準備を進める中で越智の活動を知り、「我々のように、さまざまな大学や有志が同じ意図で同種のアンケートを実施する可能性があるため、筆者らが所属する本会 CE 研究会でとりまとめを行い、希望者が自由にアンケート項目を利用できるようにした方がよいのではないか」という話になった。そこで、急遽、本会 CE 研究会の運営委員会として、高等学校情報科での学びに関する調査アンケートの質問項目を作成することとなった。

とりまとめにあたっては、筆者の長瀧が CE 研主査として、大学等での一般情報教育に関する調査・研究活動を行っている本会の一般情報教育委員会（GE）と初等・中等教育における情報教育の振興を目的として活動を行っている初等中等教育委員会（PS）と連携を図り、両委員会からも協力を得ることとなった。

アンケート項目については、筆者らが作成した案を叩き台とし、CE 研究会の運営委員ならびに GE・PS 委員の先生方にご確認とご意見をいただき、改訂を重ねた。紙幅の都合上、お名前を列挙することはできないが、ご協力くださったすべての方々に對し、ここに記して深く感謝申し上げる。

アンケート項目の作成

アンケートの作成は一筋縄ではいかなかった。最大の課題は、「確認したい内容が多すぎる」という点である。筆者らに加え、本企画に賛同し協力いただいたメンバーは、高等学校における情報教育、大学における一般情報教育、高大連携などに強い関心を持っている。そのため、各自が意見を出し合うと質問項目が膨らんでいくのが自然であり、とりまとめる立場としては喜ばしい一方で整理に苦慮する状況であった。

最終的に、回答者の負担を考慮し、アンケートは長くても10～15分程度で回答を終えられる分量に収めることを目標とした。そのため、いただいた



多くの質問案を惜しみつつ取捨選択を行い、最終的に以下のような質問項目に確定した。各項目の詳細については公開している実際のアンケート項目をご参照いただきたい。

I. 回答者に関する質問

出身高校、共通テスト受験状況など

II. 教科「情報」の履修科目・履修時期に関する質問

情報科の科目履修状況

III. 教科「情報」の学びに関する質問

情報科の各学習内容に対する主観的な理解度

IV. 教科「情報」に関する総合的な質問

情報科の授業スタイル、総合的な感想等

□ I. 回答者に関する質問

質問項目の検討にあたっては、回答者の背景や出身高校の多様性も考慮する必要があった。本アンケートは大学新生のうち高校卒業者を対象とした調査であるが、大学新生は必ずしも高校卒業者とは限らない。海外の学校の卒業生(留学生を含む)や高等学校卒業程度認定試験(高卒認定)を経た学生などをどのように扱うかについて慎重に協議した結果、海外の学校の卒業生を除き、回答対象とすることとした。ただし、出身高校を尋ねる質問においては、高卒認定合格者など該当者が少数に限られる選択肢を設けると個人が特定される恐れがあるため、そのような選択肢は含めず、匿名性を担保するよう配慮した。

□ II. 教科「情報」の履修科目・履修時期に関する質問

高等学校における「情報Ⅰ」「情報Ⅱ」、旧学習指導要領の「社会と情報」「情報の科学」などの履修状況を確認する質問項目を設けた。高等学校では、学校独自の授業名(略称など)を用いている場合があり、そのため授業を受けていても履修の有無を判断できなかったり、履修時期を正確に記憶していない学生が存在したりする可能性がある。そこで、履修学年を問う選択肢に加え、「履修したが受講時期を覚え

ていない」、「履修の有無を覚えていない」といった選択肢も設けた。

□ III. 教科「情報」の学びに関する質問

高等学校で何を学び、何を身につけたかについても、できるだけ細かく具体的に把握したいと考えていた。しかし、回答者が高校卒業後の立場であることを踏まえると、そのような詳細は記憶から失われている可能性があり、また具体的な意識を持たないまま学習・習得している場合も想定される。

このため、質問項目を増やして詳細に尋ねるべきか、それとも減らして大括りで尋ねるべきかについて議論を重ねた。その結果、折衷案として、質問項目はある程度大括りに設定しつつ、具体的な学習内容を例として列挙し質問文に添える方法を採用することで、一定の解決を得た(図-3に一例を示す)。この点については多様な考え方があり、今回のアンケート項目が最適であるかどうかは断定できない。しかし少なくとも、調査者が把握すべき情報を収集できるよう配慮した構成とした。

□ IV. 教科「情報」に関する総合的な質問

最後に、教科「情報」での授業スタイルおよび総合的な感想に関する質問項目を作成した。授業スタイルについては、「黒板やスクリーンを用いた先生の説明」、「テキストや動画など教材を用いて自分のペースで学習していく活動」、「ペアワークやグループワーク」、「話し合いや教え合い、コンピュータを

教科「情報」で学んだ「コミュニケーションと情報デザイン」に関する学習内容を十分に理解している。

「コミュニケーションと情報デザイン」の学習内容の例：

- ・情報デザインの役割(コミュニケーションと情報デザインの関係性、情報デザインの目的)
- ・情報デザインのプロセス
- ・情報デザインの手法(情報の抽象化、可視化、構造化、レイアウト、配色、フォントなど)
- ・情報デザインが社会に果たす役割(ユーザビリティ、アクセシビリティ、ユニバーサルデザインなど)

図-3 「コミュニケーションと情報デザイン」の内容理解を問う設問の例

用いた実習」,「プレゼンテーションや発表を用いた授業」という5つの授業形態を想定し,それぞれの実施頻度を尋ねる質問を設けた。また,教科「情報」を受けた総合的な感想として,「楽しさ」,「興味」,「理解」,「難易度の適切さ」に関する質問項目を設けた。

アンケートの公表と反響

アンケート作成時に複数の問合せが寄せられた点の1つに,「このアンケートは一斉に実施しなければならないのか」というものがあつた。全国の大学等で期間や方法を統一し,一斉に実施できるのであれば理想的である。しかし,全国に多数存在する多様な大学等がそのような横並びの実施に協力することは,現実的には困難である。

そこで,本取組はアンケート質問項目のみを提供するものと位置づけ,調査の詳細については規定しないこととした。質問項目を提示するにとどめ,それを質問紙等にどのように反映し,どのように実施するかについては,各大学等の裁量に委ねることとしたのである。この方針により,大規模なデータを一斉に収集することは難しくなる一方で,結果を公表しない大学等も含めて,各機関の判断で柔軟に活用できるようになった。ただし,作成者側としては次のような活用方法を想定している。

- 回答者は2025年度以降に大学等に入学した新入生
 - － 学部などは不問で,すべての新入生が回答可能。ただし,実際の実施は一部の学部のみでも可能。
- 各年度4月以降のできるだけ早い時期に実施
- 提供されたアンケート項目を,オンラインフォーム(Google フォームなど)に落とし込み,電子的な方法でアンケートを実施
 - － オンラインフォームは,各大学等で使用しているシステムを利用する。
 - － 紙媒体での実施も可能だが,質問数が多いため推奨しない。

作成したアンケートは2025年4月2日にCE研究会のWebサイトで公開を開始した。アクセスログを取得していないため正確な人数は把握していないものの,公開直後から複数の大学関係者によるアクセスが確認された。また,CE研究会の問合せ先メールアドレスには利用に関する複数の連絡が寄せられ,研究会やSNS等においてもアンケートへの関心を示すコメントを複数いただいた。

なお,アンケート実施後の結果については,可能であればCE研究会の研究発表会などで報告していただくことを推奨している。2025年6月に開催されたCE研究会第180回研究発表会(CE180)では,本アンケートに関する3件の発表^{5)~7)}が行われ,各大学における速報的な結果が報告された。発表は3件にとどまったものの,すでに大学ごとに異なる傾向が見られる質問項目もあり,今後さらに多くの調査結果が公表されることで知見の深化が期待される。

今後の活用に向けて

これまでも授業担当教員や大学等によって,新入生の実態調査を行い,授業やカリキュラムの改善に活用してきた例は少なくないと考えられる。しかし今回,このような形で共通のアンケート項目を提示できたことにより,同様の取組を実施しやすくなったと考えられる。

今後,多くの大学で本アンケートが実施され,その結果が研究発表会等で公開されることにより,全国的な大学新入生の情報教育経験の実態が明らかになることが期待される。本稿を通して関心を持たれた方は,CE研のWebサイトで公開されているアンケート項目を入手してアンケートを実施していただきたい。仮に他大学の結果と類似した結果が得られた場合でも,さまざまな大学での結果が公開されることに意味があるため,そういったものも含めて,結果をCE研究会の研究発表会等で公開していただければ幸いである。



参考文献

- 1) 水野修治：大学入学共通テスト新科目「情報」～これまでの経緯とサンプル問題～，情報処理，Vol.62，No.7，pp.326-330（July 2021）.
- 2) 大学入試センター：令和7年度大学入学共通テスト 実施結果の概要（2025）.
- 3) 情報処理学会コンピュータと教育研究会：高等学校情報科での学びに関する調査アンケート（2025），<https://ce.eplang.jp/index.php?InformaticsSurvey>
- 4) 中鉢直宏：大学の情報システム教育と2025年度問題の展望—シンポジウム「これからの大学の情報教育」2022開催報告—，情報処理，Vol.64，No.9，pp.458-461（Sep. 2023）.
- 5) 杉嶋茜里，陳品聿，内田奈津子：2025年度大学入学共通テスト「情報Ⅰ」における高等学校情報科の学びの関係：教育学部におけるアンケート調査報告，情報処理学会研究報告，Vol.2025-CE-180，No.7，pp.1-13（2025）.
- 6) 内田奈津子：2025年度大学入学共通テスト「情報Ⅰ」の受験経験と高等学校情報科の学びに関する調査（速報），情報処理学会研究報告，Vol.2025-CE-180，No.8，pp.1-9（2025）.
- 7) 中国長新：高等学校情報科での学びに関する調査結果と考察：麗澤大学2025年度新入生を対象とした調査，情報処理学会研究報告，Vol.2025-CE-180，No.9，pp.1-10（2025）.

（2025年8月30日受付）



越智 徹（正会員） toru.ochi@oit.ac.jp

大阪工業大学情報センター准教授。専門は情報工学，情報教育。



白井詩沙香（正会員） shizuka.shirai.cmc@osaka-u.ac.jp

大阪大学D3センター准教授。専門はヒューマンコンピュータインタラクション，情報教育，教育工学。



中国長新（正会員） nnakazon@reitaku-u.ac.jp

麗澤大学国際学部准教授。専門は教育工学，情報教育，情報倫理，図書館情報学。



長瀧寛之（正会員） nagataki.slics@osaka-u.ac.jp

大阪大学学生・ライフサイクルサポートセンター教授。専門はICT活用教育，情報教育。

情報処理学会 小中高校教員支援プログラム https://www.ipsj.or.jp/member/teachers_support.html

2025年度から5年間、小中高校教員支援プログラムを実施いたします。
詳しくは Web サイトをご確認ください。



受付期間 毎年4月1日～11月30日

対象 小中高校（相当する教育機関を含む）に教職員として勤務されている方
（国や自治体等の教育行政職に出向している方を含む）

内容

1. 入会金（2,000円）が免除となります
 2. 正会員の会費（10,800円）が半額（5,400円）に割引されます
- ※会員サービス内容は正会員と同じです

教員にとってのメリットとは

- 会誌「情報処理」が毎月読める
- 中高生情報学研究コンテスト／Exciting Coding! Junior／初等中等教員研究発表セッションなど生徒向けや教員向けイベントを情報教育に活用できる
- 情報処理学会全国大会やコンピュータと教育研究会などにも，正会員として参加できる
- 「情報」に関する豊富な知識を得ることができる
- 情報共有や意見交換の場が提供され，初等中等教育やジュニア会員に関係する活動の支援が得られる



問合せ先 mem@ipsj.or.jp

令和7年度大学入学共通テスト『情報Ⅰ』の問題評価・分析について ～初めての共通テスト『情報Ⅰ』を振り返る～

水野修治

(独) 大学入試センター

令和7年1月19日、大学入学共通テスト（以下、「共通テスト」）で初めて教科「情報」の試験『情報Ⅰ』が実施された¹⁾。まず、この紙面を借りて、これまで試験実施に向けて本会（以下、「学会」）を含め多くの関係者からご支援・ご協力をいただいたことに、深く感謝申し上げます。同年6月末には問題評価・分析委員会から試験『情報Ⅰ』に係る分析・評価の報告書が公表された²⁾。この報告書には、高等学校教科担当教員（以下、「高校担当教員」）や学会から試験問題の内容・範囲、分量・程度などについて意見・評価をいただいている。そこで限られた紙面であるが、いただいた評価・分析結果と公表された試験情報データ²⁾をもとに、初めて実施された共通テスト『情報Ⅰ』の試験を振り返ってみたい。

令和7年度共通テスト試験結果概要

教科「情報」は、新旧課程併せて30万人（全受験者の65.5%）が受験した（図-1）。これは、国立大学協会が原則「情報」を課すという基本方針を示したこと

全志願者数	495,171 人	
全受験者数	462,066 人	
	本試験のみ	461,188 人
	追試験のみ	561 人
	本試験+追試験	305 人
	本試験+再試験	12 人
受験率	93.31%	
本試験	『情報Ⅰ』 279,718 人	全受験者の65.5%
	『旧情報』 22,171 人	
追試験	「情報」 594 人	

図-1 令和7年度共通テスト受験者数等

が大きく影響し、国立大学志願者のほとんどが受験したと考えられる。私立大学の入学者選抜に共通テスト「情報」を課す大学がまだそれほど多くはないことを鑑みると、「情報」の受験者に占める国立大学志願者の割合は、他教科に比べても幾分高いと考えられる。

次に、「情報」の試験結果を表-1に示す。『情報Ⅰ』（本試験）の平均点は69.26で、ほかの科目に比べてやや高めではあったが、初めての試験であることや、前述の受験者層であることを踏まえれば、初年度の試験として適正な範囲に収まったと考えている。高校担当教員からも、「平均点は69.26というやや高得点となったが、初めて導入された科目ということもあり、不安を抱えた受験者への配慮として概ね許容範囲であったと思われる」という評価をいただいた。

図-2は、設問別の正答率を表したものである。これまで一度も実施されることがない試験ということもあり、問題作成部会としても難易度設定は大変苦労したところであった。その結果、大問別の正答率²⁾は、第1問64.9%、第2問76.9%、第3問69.4%、第4問64.4%となっており、やや第2問が高かったものの受験者はバランスよく正答できていると考えられる。一方、設問別正答率を見ると、正答率80%を超える設問も少なくなかったが、学会からは、「『情報Ⅰ』初年度の出題としては妥当と考

表-1 「情報」の試験結果（本試験）

科目名	受験者数	平均点	標準偏差
『情報Ⅰ』	279,718	69.26	16.09
『旧情報』	22,171	72.82	14.43



える。しかし、正答率が8割以上の設問については、今後段階的に是正されることを期待する」という意見をいただいた。また、正答率が20～30%台の設問もいくつか見られ、どのような設問で受験者が正答を導けなかったのか、難しく感じたのかを見定めることができる。その設問がどのような資質・能力を測ろうとしているのかをしっかりと見極めることで、今後の授業改善に役立てられることを期待したい。今回、最も正答率が低かった設問は、第3問の中にあるプログラムをトレースする力が求められた空欄[ク]で、正答率は21.9%であった。学会から

は、「トレースは基本的な能力であり、設問として適切であったと考える」とのご意見をいただいている。指導者にとって、生徒がプログラムの実習等で自ら試行錯誤する活動が十分できているか改めて考える機会になればと思う。

問題作成方針と試験問題

学習指導要領では、変化の激しい社会に対応するため資質・能力の3つの柱、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を重視しており、探究学習もそのための重要な活動と位置付けられている。そして、共通テストもそうした授業を通して培われた生徒の資質・能力を適切に評価できるよう、以下を問題作成の基本的な考え方としている³⁾。

- (1) 大学への入学志願者が高等学校教育の成果として身に付けた、知識・技能や思考力・判断力・表現力等を問う問題の作成
- (2) 各教科・科目の特質に応じた学習の過程を重視した問題の作成
- (3) 多様な入学志願者の学力を適切に評価する問題の作成

そして、新科目『情報Ⅰ』の試験問題も、この基本的な考え方と科目の特性を踏まえ、図-3のような問題作成方針のもと作成されている。

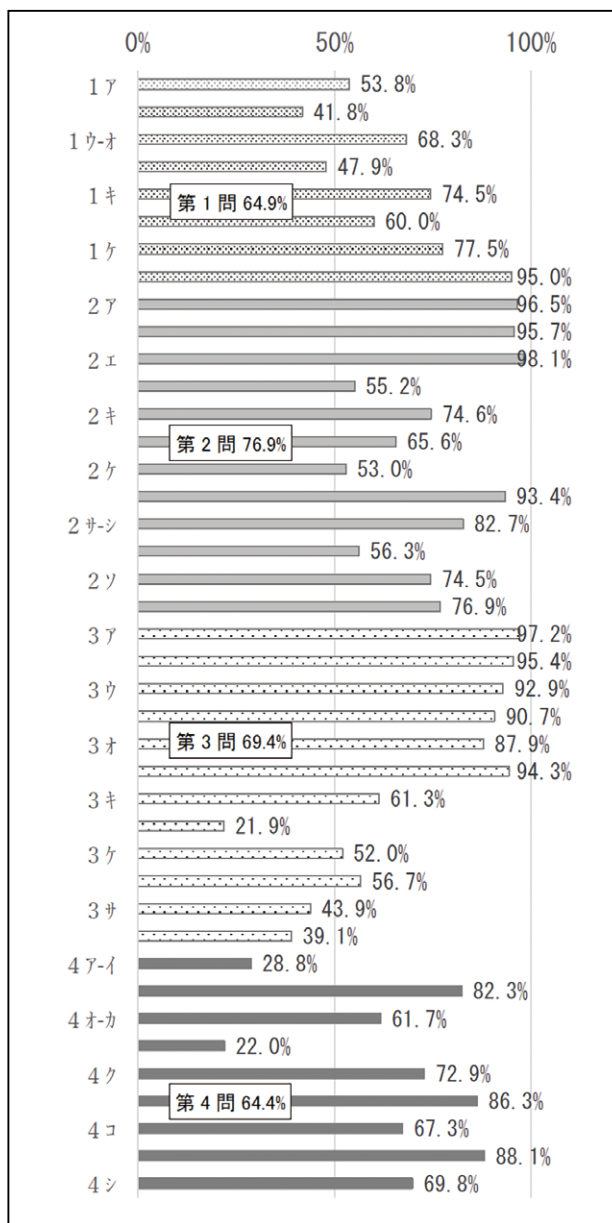


図-2 『情報Ⅰ』(本試験)設問別正答率

- 日常的な事象や社会的な事象などを情報とその結び付きとして捉え、情報と情報技術を活用した問題の発見・解決に向けて探究する活動の過程、及び情報社会と人との関わりを重視する。

問題の作成に当たっては、社会や身近な生活の中の題材、及び受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事例や事象について、情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力を問う問題などとともに、問題の発見・解決に向けて考察する力を問う問題も含めて検討する。

- プログラミングに関する問題を出題する際のプログラム表記は、授業で多様なプログラミング言語が利用される可能性があることから、受験者が初見でも理解できる大学入試センター独自のプログラム表記を用いる。

図-3 『情報Ⅰ』問題作成方針

この度の『情報Ⅰ』の問題は、情報や情報技術に関する小問群の第1問、テーマ別の2つの問題からなる第2問、プログラミングに関する第3問、データの活用に関する第4問の4つの大問で構成している。この点についても、学会からは「本試験の大問構成や分量は試作問題と概ね同じで、受験者が戸惑うことはなく、最初の『情報Ⅰ』の出題としては妥当であったと言える」と評価をいただいた。

それぞれの問題は、先の問題作成方針に従って、さまざまな事象を情報とその結び付きの視点から捉え、単なる知識・技能ばかりではなく、探究的な活動の中で生きて働く知識を生かした思考力・判断力・表現力等を発揮して解く問題となっている。

高校担当教員からは、「大学入学共通テスト問題作成方針に基づいたものであった。全体的に、知識のみを問うような設問は少なく、知識を活用して問題の発見・解決に向けて探究する活動の過程を題材として思考力・判断力・表現力等を問う設問が多く出題された。(中略)範囲については、学習指導要領の範囲内から適切に出題されていた」とのご意見をいただいた。また、学会からも「『社会や身近な生活の中の題材、及び受験者にとって既知ではないものも含めた資料等に示された事例や事象について、情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力を問う問題』や『問題の発見・解決に向けて考察する力を問う問題』が出題されており、適切であったと言える」とのご意見をいただいた。

共通テストは、各教科の本質的な力を測ることを重視している。したがって、一日一日の授業を大切にすることで、特別な試験対策を行わずとも、教科の本質を追求する学習をしていれば、しっかり対応できていると考えている。特に、第3問のプログラミングの問題と第4問のデータの活用の問題は、問題解決の過程を問題の中で展開している。中でも第4問は、旅行に関するオープンデータを基に、図-4で示されている探究の過程「①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現」⁴⁾を問題の中で何度も繰り返している。これは、学校の授業で実践し

ている探究的な活動をそのまま問題にしていると考えることができる。この点について、高校担当教員からは「実際の情報Ⅰの授業や探究活動にも応用でき、受験者にとって学びのある良問であったと言える」との意見をいただいた。

試験問題を授業改善に生かす

学習指導要領で示されている主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善に、共通テストの試験問題を活用できないだろうか。これは、もちろん共通テストの問題を解くことを意味するものではない。授業で行われる、実践的な問題解決や探究活動の過程で培われた資質能力を測るのが共通テストであり、その試験問題は、学習の過程を重視している。つまり、試験問題には授業改善に役立つ要素がコンパクトに詰め込まれていると考えられないだろうか。

たとえば、第2問Bのシミュレーションの題材について、表計算を使って実際に1万回試行し、その結果をもとに探究させてはどうか(図-5)。体験を通してそこから考察できることもあるであろう。また、第3問のプログラミングを実際に取り組んでもよい。問題解決を題材に自ら試行錯誤することは、プログラムをトレースする力を育むなど確実に生徒の力になるはずである。第4問のデータの活用の問題については、実際に生徒に観光庁が公表している旅行・観光消費動向調査のデータをダウンロードさせ、分

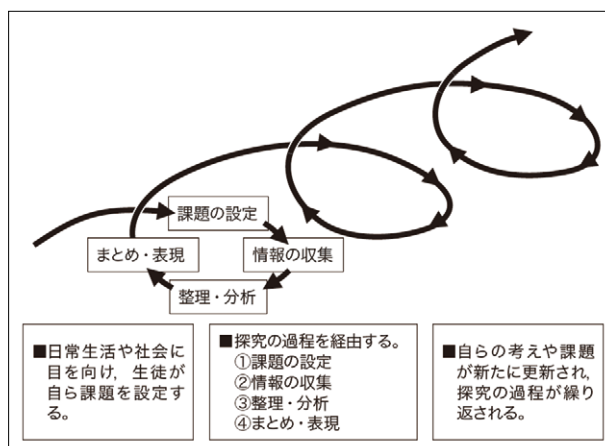


図-4 探究における生徒の学習の姿



析に必要なデータを整理してから各変数を組み合わせた散布図や相関係数を求めることは容易にできるであろう(図-6)。そこで生徒にさらに探究させ、問題で展開しているように、各都道府県の人口で割った値を使って新たな指標で再度散布図と相関係数を求めて、それをもとにさらに考察させることもできる。

共通テスト『情報Ⅰ』の持続可能な実施に向けて

高校担当教員からは、総括的な評価として「(前略) 高大接続の観点から、この試験が高等学校等から大学等への情報教育の学びの繋がりに大きく寄与することを切に願いたい。(中略) また、それぞれの問題の場面設定や題材からは、従来の知識偏重の授業から脱却し、生徒が主体となる探究的な学びを促進すべきであるという大学入試センターの強いメッセージが感じられた。(中略) 来年度以降も本年度の出題方針が継続され、主体的・対話的で深い学びに

よる探究の過程を重視した授業の成果を測る試験を期待したい」とのご意見をいただいた。また、学会からは、今後の共通テストへの要望として、「授業の中でしっかりと実践に取り組むことで身に付く『情報社会と人との関わりや情報の科学的な理解を基に考察する力』や『問題の発見・解決に向けて考察する力』を測る出題となっている。今後もこのような問題を作成していくことを、強く期待している」とのご意見をいただいた。ともに、問題作成方針や試験問題について高く評価していただいたと考える。また、報告書では、試験問題の改善に向けて多くの有益な意見や提案もいただいている。今後の問題作成においてぜひ参考にしたい。

共通テスト『情報Ⅰ』は、来年度以降も約30万人の受験者が見込まれ、高大において情報教育の学びを接続する重要な役割を担っている。この役割を果たすためには、高校担当教員や学会からの期待に応える良質な試験問題を継続して作成していかなければならない。これには、多くの専門家の協力なしでは成し遂げることができない。安定した試験の実施に向けて、改めて引き続きのご支援・ご協力をお願いしたい。

参考文献

- 1) 令和7年度試験の問題・正解, <https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/kakomondai/r7/> (参照 2025-08-31)
- 2) 令和7年度 大学入学共通テスト問題評価・分析委員会報告書, https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/hyouka/r7_hyouka/ (参照 2025-08-31)
- 3) 令和7年度大学入学選抜に係る大学入学共通テスト問題作成方針, https://www.dnc.ac.jp/kyotsu/kako_shiken_jouhou/r7/#monsaku (参照 2025-08-31)
- 4) 文部科学省：(高等学校編) 今、求められる力を高める総合的な探究の時間の展開 (令和5年3月), https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/sougou/20230522-mxt_kyouiku_soutantebiki02_1.pdf (参照 2025-08-31)

(2025年8月26日受付)

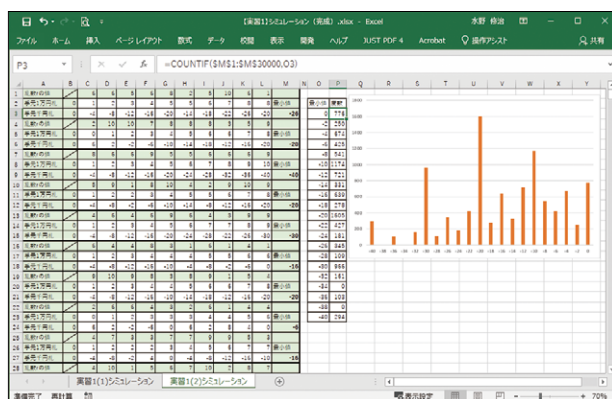


図-5 第2問Bのシミュレーションの実習イメージ

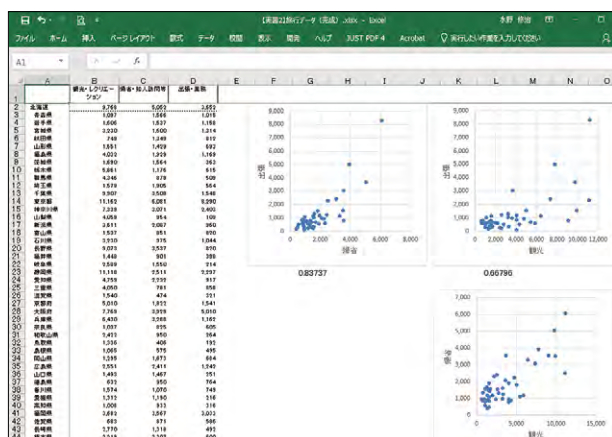


図-6 第4問の分析の実習イメージ



水野修治 (正会員) s_mizuno@cen.dnc.ac.jp

愛知県立高等学校教諭、総合教育センター研究指導主事(兼務)、教育委員会高等学校教育課指導主事、愛知県立大学情報科学部非常勤講師、高等学校教頭を経て2019年より(独)大学入試センター試験問題企画画(現:試験問題調査官)、本会シニア会員。